

お此お糸

野村胡堂

一

「さあ大変だ、親分」

ガラツ八の八五郎は、鬚^{まげさき}先で春風を搔^かきわけるようにすつ飛んで来ました。よく晴れた二月のある朝、何処からともなく聞える小鳥の囀^{さえず}りや、ほんのりと漂^{ただよ}う梅の花の匂いをなつかしむともなく、江戸開府以来と言われた捕物の名人銭形の平次は、縁側に立ってこうぼんやり眺めていたのです。

「相変らず騒々しい奴じゃないか、何がいったい大変なんだ」

「大変も大変、今日のは別^{べつ}詔^{あつらえ}の大変だ、驚いちゃいけませんよ、親分」

「誰が驚くものか、お前の大変は食いつけているよ。犬が喧嘩しても大変、金沢町のお此坊^{この}に男ができてても大変——」

「そのお此坊の男が殺されたとしたらどんなもので、親分」
「何んだと、あの池月^{いけづき}の与三郎が殺されたというのか」

「ね、驚くでしよう親分。あの打ち殺しても死にそうもない、ノリクラリとした鰻野郎^{うなぎ}の与三郎が、脳天^{のうてん}を石で割られてお茶の水^{がけした}の崖下に投り出されているんだ」

「行ってみよう」

銭形平次は気軽に尻を上げました。お茶の水といえはすぐ眼と鼻の間で、銭形平次の縄張内でもあったのです。

八五郎に案内されて、聖堂^{せいどう}裏からその頃は茶店などのあったお茶の水の崖^{がけ}の上へ行ってみると、その辺はもう一パイの弥次馬、

町役人や元町の文七と言う中年者の御用聞などが、声を潤^からしてそれを追っ払っております。

「え、寄るな寄るな、見世物じゃねえ、まごまごすると掛り合いだぞ」

露^{つゆはら}払いのガラッ八が持前の塩^{しお}辛い地声でワメキ立てながら、人波をかきわけて中へ潜^{くぐ}ると、

「お、銭形の兄^{あに}哥、ちようど宜い塩梅だ」

元町の文七はホツとした顔になりました。自分より十歳も若い平次と張合って、手柄争いに血を沸かせたのも昔で、今では平次の頭脳と腕と、それよりも功名にも利害にもこだわらない恬^{てんたん}淡な人柄に推服^{すいふく}して、いつの間にやら若い兄貴に立てている文七だったのです。

「元町の兄^{あに}哥、遅れて済まなかった——お、こりや大変だ」

崖の下から引揚げたばかりで、まだ菰^{こも}もかけない与三郎の死骸が、折からの麗^{うつくし}かな春の朝陽に照らされて、見るも無惨^{むざん}な姿を横たえているではありませんか。

「こうなっちゃ先陣争いの池^{いけづき}月野郎もカラだらしがねえ」

ついガラッ八の八五郎は、日頃の反感がこみ上げたものか、遠慮のないことを言って、ペッペツと唾^{つば}を吐くのでした。

小博奕^{こばくち}と押借の外には能^{のう}のない男ですが、恰好がちよいと意気なのと、顔がノッペリしているのを資本に、神田から本郷へかけて、浮気な娘という娘を漁^{あさ}り廻り、宇治川の先陣争いに譬^{たと}えて、池月の与三郎と自分から名乗ったほどの厄介な男ですから、八五郎のような女とは縁の遠い正直者から嫌われ蔑^{さげす}まれたのも無理のないことです。

「馬鹿野郎、何んという口のききようだ」

平次は屹きつとたしなめながら、自分は死骸の側にしゃがんで片手拝みに眼をつぶりました。

与三郎の死骸というのは、全く眼も当てられない有様で、身だしなみの良いのを自慢にしている小意気な衿あわせが、肩から深紅の網を被ったように、血汐を浴びているのです。

「突き落される機はずみに、その辺の石で頭を打ったのじゃないかな」
元町の文七はそんな事を考えているのでしよう、石で打ち割ったとすれば、あまりに猛烈です。

「いや、崖にはそんな石はない、——それに自分の身体に網のように血を被っているところを見ると、逆様に落ちて石で頭を打ったのじゃなくて、立っているところを、重い物で脳天をやられたんだ、それも得物は石じゃないようだ、傷痕きずあとに几帳面きちようめんな丸味があ
るぜ」

平次の言うのは尤もつともでした。

「ひどい返り血だろうな」

文七は平次の意見に承服しながら斯こう素直すなおに言うのです。

「それも一つの証拠になる」

「ところで、与三郎が殺されたとなれば、物盗りや喧嘩じゃあるまい」

と平次。

「空っ尻ののらくら野郎だ、泥棒と喧嘩には縁がありませんよ」
八五郎はまた嘴くちばしをだしました。

「仏様の悪口は止せよ」

「へエ——」

「いづれ女出入りだろうが、いろ事でこの男を怨^{うら}んでいる者は、五人や十人じゃないぜ」

文七は三つ七つと指を折っております。

「古いのはいくらか余燼^{よじん}もさめるだろう、新しい出入り事は？」

「新しいのは越後屋のお此^{この}で、与三郎の野郎、この間から自慢らしく吹聴^{ふいちやう}して歩いていましたよ」

と、八五郎。

「すると、与三郎を殺したのはお此の事で怨んでいる者だということのか」

「お此の許嫁^{いいなずけ}は越後屋の養子の金次郎じゃありませんか」

事件の外貌^{がいぼう}が次第にはつきりして来ました。

「これだけのことをするのは、よっほど胆^{きも}の据^{すわ}った、力のある男でなきや——」

平次は首を捻^{ひね}ります。

「越後屋の金次郎は男振りも器量も町内の褒めものですぜ。その上明神下の先生のところへ通って、ヤットウの稽古^{けいこ}もしたことがあるという話だ」

八五郎は念入りの注を入れました。

二

「親分、——変な噂がありますぜ」

「何んだ八」

「金沢町の越後屋から、養子の金次郎を挙^あげて行った野郎がある相^{そう}ですよ」

「誰だそいつは？」

平次もさすがに驚きました。お茶の水で小半日係りの同心の出役を迎えて、検屍の済むのを待ってるうちに、金沢町へ抜け駆けして、第一番の疑いのかかった金次郎を挙げて行くとは気が早過ぎます。

「お神楽の清吉の野郎ですよ。先刻^{さっき}チラリと顔を見たと思ったら、親分の話を聴いて、あわてて金沢町へ飛んだのでしょう、太てえ野郎じゃありませんか」

「放っておけ放っておけ、戸も障子もない野天でいろんな話を話しているんだもの、話だって聴くだろう。そこまで気が付きながら、ぼんやり小半日過した此方^{こっち}が間抜けさ」

「でも親分」

八五郎は躍起^{やつき}となりますが、平次はさらに驚く様子もありません。

「それより、お前一と走り越後屋へ行つて、ゆうべ金次郎が外へ出たか出なかったか、それを訊^きいてくれ。それから手ぬかりもあるまいが、お此の顔色も見るんだ」

「親分は？」

「俺は殺された与三郎の方を洗って見る、それが順当だろうと思う」

呑込んで飛んで行く八五郎の後ろ姿を見送って、銭形の平次と元町の文七はツイ湯島五丁目に住んでいる与三郎の巢を見廻りました。そこは荒物屋の裏二階で、何となく小綺麗^{こぎれい}に住んでおりますが、家主の荒物屋で訊^きくと、与三郎の評判はまことに滅茶滅^{めちやめ}茶^{ちや}です。軽薄^{うそ}で嘘つきで、男のくせにお洒落^{しゃれ}で、図々しくて欲^{よく}が

深くて、——こう聴かされると取柄はありません。

「与三郎を怨^{うら}んでいる者に心当りはないか」

「怨んでいる者ばかりですよ、間違っても褒める者なんかありません、第一にこの私だって、幾月も幾月も部屋代を払われなきや喜んでばかりもいられません」

荒物屋の老爺^{おやじ}はこう言った調子でした。

「ゆうべ何刻^{いっ}ごろ出たんだ」

「宵のうちでしたよ、誰か手紙を持って来たようで、裏口で自分で受取ってすぐ出かけました」

「使の者は男か、女か、それとも子供か」

「私はよく見ませんが、達者な男のようでした。尤^{もった}も何時ものことですが、昨夜はことに念入りにめかし込んで出かけたようです」

それっ切り、あとは何んにもわかりません。念のため与三郎の部屋を見せてもらいましたが、長火鉢があつて、鏡台^{きやうだい}や化粧道具が揃^{そろ}っていて、まるで若い女の部屋のようにですが、ゆうべ受取った手紙は言うまでもなく、手掛りになりそうなものは一つも無かつたのです。

いざ引揚げようというとき、荒物屋の老爺は近頃の与三郎は越後屋のお此^{この}に夢中で、母親さえ承知してくれば、近い内に自分は越後屋へ聳^{むこ}入するかも知れない、何しろ金沢町でも一二といわれた身上^{しんしやう}で、外神田一番の味噌屋だから、越後屋の聳^{むこ}になれば人^に後ろ指は差させない——などと良い心持^{こころ}そうに脂下^{やにさが}つていたと苦々しく話してくれるのでした。

斯^こうなると、いよいよ怪しいのは越後屋の養子の金次郎ですが、お神楽の清吉^{せんべん}に先鞭^{せんべん}をつけられては、今さら何うすることも出来

ません。

一応平次の家へ引揚げ、辞退する文七を引留めて一本つけさしている、すっかり暗くなつてから、ガラッ八の八五郎が鬼の首でも取つたように路地の外から声を掛けて帰つて来ました。

「親分、大手柄だ、喜んで下さいよ、親分」

「馬鹿だなア、大きな声で、人聞きの悪い」

「だって、路地の花道はやけに長いぜ、これほどの大手柄おおてがらを黙つて舞台にかかつちゃ勿体もったいない」

「呆あきれた野郎だ、何処の猫の子が鼠を捕つたか知らねえが、大手柄が聞いて呆れるぜ」

「そういったものでもありませんよ、この八五郎の知恵と弁舌で、金次郎の縄を解いたんですぜ、親分」

「フーム」

「そいつは面白そうだ、八五郎兄哥の手柄話を聴いてやろうじゃないか」

元町の文七は口を容いれます。

「こういうわけだ、聴いておくんなさい、文七親分、——金沢町の越後屋へ行つて、店中の口を開かせると、娘のお此このが近ごろ与三郎に熱くなつているので、許嫁いいなづけの金次郎が面白くないのは評判の通りだが、金次郎は根が確しつり者で、人などを殺すような男じゃない。それに昨夜は、越後屋の姪めいでお糸というのが急病で、下男とらぞうの寅蔵は在所へ帰つて留守だし、小僧や下女では夜のことで役に立たず、親切者の金次郎が、自分で御徒士町おかちまちまでお糸の合薬を買いに行つていますよ。御徒士町の薬屋も訊いたが、それに間違いはなく、また宵の内に半刻はんときそこそこで帰っているから、お茶の水



へ行って、与三郎を殺す隙ひまなんかありやしません」

「それから何うした」

「姪めいのお糸は今日はもう気分が良くなって床の上へ起上がっていましたが、私のために金次郎さんが縛られちゃ申訳がないこれこれ斯うだから、どうか助けてやって下さいと、私を拝むじやありませんか。親分方の前だが、娘のお此このも良い女だが、姪めいのお糸というのは、跛者びっこで病身だというけれど、そりゃ美しい女ですよ」

「そんな事はどうでもいい、それからどうした？」

「番屋へ駆け付けて、お調べ中のお係り同心武蔵健吾様むさしけんごに申あもうしげ、お神樂の清吉の見ている前で金次郎の縄を解いてやりましたよ。その時の清吉の顔というものは――」

「それは大手柄だ」

元町の文七は本当に嬉しそうでした。この辺まで乗出して来た

お神樂の清吉の鼻をあかしたことは、平次自身よりも文七の喜びだったのです。

三

事件はこれだけでは納まらず、寧ろ^{むし}これが序幕^{じよまく}で、この後の発展が凄まじく恐ろしいものでした。

それから三日目の夕刻、今度は金沢町の越後屋の娘お此^{この}が自分の家の庭先で、曾^{かつ}て与三郎がやられたと同じように脳天を打ち割られて死んでいたのです。

お隣の師匠^{ほう}のところへ行つて、お仕事の稽古^{けいこ}を口実に、毎日のように遊び呆^{ぼう}けて、幾度も幾度も晩の御飯のお使を受けて帰るお此は、その日も下女に二三度無駄足をさして、とつぷり暗くなつてから、それでも遅い町家の夕食に駆けつけるように、裏木戸を入つて庭へ廻つたところを、何者とも知れぬ手に、重い凶器^{きようき}で脳天をやられ、たった一と打ちで、声も立てずに死んでしまった様子でした。

小僧の常吉が見付けて大騒ぎになり、八五郎の注進で平次が駆け付けた時は、死骸を家の中に取り入れて、母親のお浅を始め、姪^{めい}のお糸、許嫁の金次郎などが、転倒した中にも悲嘆にくれている真つ最中でした。

その中へ飛込んだ銭形の平次と八五郎は、まず型通りお此の死骸から見せてもらいます。嗚咽^{おえつ}の中にこんな仕事をするのは、馴^なれた事ながら、あまり好い心持のものではありません。

何^{なにか}彼の世話を焼いてくれるのは、養子でもあり支配人格でもあ

り、殺されたお此の許嫁でもあるあの金次郎でした。お店者^{たなもの}というにしては少し愛想ツけのない、三十前後の立派な男で、浮気っぽいお此に気に入られなかったかも知れませんが、二三年前に亡くなった先代の主人新之助の、鑑識^{めきき}の確かさを思わせる人柄です。お此の死骸は凄惨^{せいさん}を極めました。少し肥った、丸ぽちやの愛嬌者で、十九にしてはませせておりましたが、蓮葉^{はすっぱ}で口上手で、誰にも世辞が良いので、町内の男達の評判は大したもので、現に八五郎なども、その崇拜者^{すうはいしや}の一人だったかも知れません。傷は与三郎同録、重い鈍器^{どんき}で力任せに殴^{なぐ}ったもので、恐ろしい力を思わせるもの、血汐は顔から肩へ、胸へ、網の目に流れております。

「親分さん」

五十年輩の母親のお浅は、恐ろしい悲嘆に打ちひしがれて、平次に呼びかけても、その先をつづける言葉ありません。それを引取って、

「お此さんを殺した悪者を縛って下さい——ね、伯母さん」

と側から優しく取次ぐのは、姪^{めい}のお糸です。これは二十一二のこの時代の通念からは年増とも言って宜い娘ですが、細っそりとした青白くて、物静かな品の良い、——その癖申分なく美しい女でした。跛者^{びっこ}で病身なために、あまり外へ出る機会もなく、従って嫁の口も滅多にありませんが、熟^{じゅく}し切って虫の付いた果物のような、何んともいえない不思議な魅力の持主でした。

「騒ぎのあった時、皆んな何処にいたのだ」

平次は静かに調べを始めます。

「私と伯母様^{おば}はここに居りました。下女のお稲はお勝手に御膳を

揃えていたようでございます」

お糸はつつましく応^{こた}えました。この三人の女は全く嫌疑の外に置かなければなりません。

「金次郎は？」

「私は蔵の中におりました」

「暗くなつてから？」

「少しばかり片付けが残つておりました。それを済して、締りをするつもりで外へ出るとあの騒^{さわ}ぎで——すぐ庭先へ駆けつけました」

「外に誰と誰がいるのだ」

「手代の兼松は通いで、——その頃は小僧の常吉と店にいたようでございます」

「それから」

「あとは下男の寅蔵というのがおりますが、これは六七日前から練馬^{ねりま}の実家へ親が病気で帰っております」

そう聴くと、お此を殺す時を持った人間は、誰も見ないところに一人で仕事をしていた金次郎たった一人になります。それとも下手人^{げしゅにん}は外から入ったものでしょうか。

「庭の現場を見せて貰おう」

平次は外へ出ました。案内に立ったのは提灯^{ちようちん}を持った金次郎、その背を見て、平次は何やらガラッ八に眼配せしました。

庭と言ったところで僅かばかりの木があつて、形ばかりの石を配置した殺風景極まるものですが、商売用らしい雑物の間を縫つて行くと右手には木戸があつて隣の家の路地に通じ、左手には金次郎がいたという土蔵へ通ずる生湿^{なまじめ}りの道があります。

お此このが入った儘か、それとも曲者が逃げ去ったか、木戸は輪鍵わかぎを外して夜風に煽られていたのでした。

庭はこぼれた血汐をめぐって、前後左右滅茶滅茶に踏み荒され、足跡からは何んの発見も望まれません。

そこから引返して店へ行くと手代の兼松と小僧の常吉は、物に脅おびえたように、帳場格子の前にマジマジと坐っております。兼松は四十七八の憶病おくびようそうな中年者、常吉は十三四の生意氣盛り、どちらも若い女などをあやめる人間とは縁が遠く、兼松は小金を溜ためるに余念がなく、常吉は悪戯いたずらと買い喰いの外には何んの望のない姿です。それに二人が店に一緒にいたというのに嘘はないらしく、二人が互に底かばい合う程仲のよくないことは、平次が一と眼見たばかりでもよくわかります。

四

「あッ、待った」

「――」

ガラッ八は物蔭から躍おどり出すと、何やら一と抱えの着物を持って、風呂場に駆け込む女の後を追いました。

「待たないか、野郎ッ」

こんな事もあるうかと、平次の眼配せを読んで、家中の者の様子を窺うかがっていた八五郎です。女の動作は八五郎が思いも及ばないほど敏捷びんしょうなものでした。暗い風呂場へポンと飛込むと、八五郎の額ひたいを叩くように、ピシリと板戸を閉めました。何やらザーッと洗う音、引開けようとしたが、中から棧さんをおろしたのか、ビクと

もしません。

「えッ、開けろッ」

戸を叩いたが応えありません。八五郎は板戸と角力すもうを取ってしばらくは手間取りましたが、フト気が付いて敷居から外すと、棧はわけもなくケシ飛んで、嚴重らしい戸がガタリと外れました。占しめたツと飛込むと、お勝手の灯が射したほの明るい中に洗濯物を水に投げ込んだまま、中には人の影もありません。気が付いて見ると、突き当りにもう一つ潜り扉くぐりどがあつて、女はそこから外へ飛出したらしいのです。

八五郎が遠慮もなく我鳴りがな立てると、平次は店の方から飛んで来ました。

「何んだ八、騒々しいじゃないか」

「灯り、灯り」
あか

「灯りが何うした」

お勝手から手燭てしよくを持って風呂場へ平次も入ります。

「この着物を風呂場へ持込んで、洗いかけた女がありますよ」

「男物の衿あわせじゃないか——おや、血が付いているぜ、それもひどい血だ」

「宜い塩梅に半分は濡れぬずにおりますね、洗い流す隙ひまはあつた筈だが、面喰らったんだね」

八五郎はひとかどの事をいいます。

お勝手にいる下女のお稲を連れて来て訊くと、衿はたった一と眼で養子の金次郎のと解りました。

「この衿を何日まで着ていたんだ」

「へエー」

「きのう金次郎はこれを着ていたのか」

「着ていたようで御座います」

「今日は？」

「今日はそれを着ていなかったようで」

「それは本当か」

「へエー」

お此が殺された今日、肝心の金次郎がこの袷を着ていなかったというのは重大なことです、愚鈍らしい下女の言葉を、何処まで信じて宜いかわかりません。

「これを風呂場へ持込んだ女というのは誰だった。顔を見なかったのか」

と平次。

「お勝手の灯りも店の灯りも遠いから顔までは見えませんでしたよ。でも私にとがめられて逃げ出すとき、足取が変だったと思いますか――」

「足取が変？」

「酔払いでなきや跛びつこですよ、親分」

八五郎の答えは予想したことです、平次を強く打った様子です。

そんな騒ぎの中へ、元町の文七が下っ引をつれて駆けつけてくれました。

多勢手が揃ったところでいろいろ手分けをして捜さがすと、第一番に縁の下に投げ込んであった血だらけの玄翁げんのうを文七が見付けてくれます。

「与三郎を殺したのもこの玄翁ですね」

八五郎は囁きます。

「その通りだ。お此を殺してから、小僧の常吉が死骸を見付けるまでには、ほんのちよつと隙があった筈だが、神田川が近いんだから、其処へ持って行つて投り込めなかったのかな。こんな物を縁の下へ入れて置けば、遅くとも明日の朝になれば、わけもなく見付かるじゃないか」

「面喰らったんですね」

平次の深い疑いも、ガラッ八に逢つては何んの変哲もありません。

「これだけ証拠が揃ったんだから、お役人の見える前に、金次郎を挙げようじゃないか」

元町の文七は懷中の捕縄などを探っております。

「まだ早いように思うが――」

「またお神樂かぐらの清吉などに横合から飛出されちや癩しやくだ、今度はあつしの手柄にさしてくれまいか、錢形の――」

文七にそうまでいわれると、これだけ証拠が揃った上は平次も強しいて止めるわけに行きません。

越後屋の養子金次郎は、与三郎殺しとお此殺しの嫌疑で、その場から文七に引つ立てられました。金次郎を庇かばい損ねたお糸は、今にも取つて押えられそうな疑懼ぎぐに戦おのきながらも、悲しみ深い眼で、縛られて行く金次郎の後ろ姿を見送っております。お浅は娘の死骸の前に泣崩れて、まだ正体ありません。

翌る日下男の寅藏が越後屋に帰つて来ました。練馬の父親がすっかり元気になったので、手土産の菜っ葉か何んかを持って、七日目に主家に戻ったのです。

折から越後屋に来ていた平次は、早速この男に逢って見ましたが、背の高い恰幅の良い三十男で、何よりその一国者らしいところが特色です。お浅に訊くと、骨身を惜まずよく働く上、少し偏屈ですが正直者で、皆んなに重宝がられているということです。「病人はどうだい、お前の留守にここでは大変なことが起ったんだが——」

「そうだ相ですね、飛んでもねえことで、——私の親仁の病氣は持病のせんきで、大したことはございませんよ」

「すると七日も休んだのは、父親の介抱のためではなかったのか」

「へエー、そうでも言わなきゃ、お暇を下さいませんよ。まあときどきは骨休めもしたくなりますから——」

こんな事を言つて、寅蔵はニヤリと笑うのです。平次は寅蔵の姿が見えなくなると、八五郎を呼んで、

「八、大急ぎで練馬へ行ってくれ。あの寅蔵とか言う男が、本当に自分の家へ帰ったかどうか」

「へエー、そりゃわけありませんが、正直に父親の病氣は大したことないが、骨休めをしたくて帰ったといってるんだから、疑って見るほどのことは無いじゃありませんか」

「それに相違あるまいが、念のためということがあるよ——練馬まではざつと五里、往きだけで日が暮れるだろう、明日の昼までに帰りや宜い」

「へエ——」

平次にそうまでいわれると、ツベコベ言う八五郎ではありません。ろくな旅の支度もせず、その場からすぐ往復十里の練馬へ出かけました。

八五郎が帰ったのは、その晩の夜中、

「泊って帰ろうと思ったが、調べも何んにも無いところで、便々と宿を取るのも馬鹿馬鹿しいと思って夜道をかけ戻って来ましたよ、——寅蔵の家はすぐ解りました。村でも中所の百姓で、親仁の寅右衛門のせんきも嘘ではなく、倅の寅蔵は七日の暇をもらったといって帰って、神妙に野良仕事や縄ないやの手伝いをして行った相です」

報告はこれだけ、これでは平次でも疑いようはありません。

その間にも元町の文七が挙げた、金次郎の調べはつづきました。与三郎を殺した時は御徒士町まで薬取りに行ったに相違ないにしても、無理に都合をして、首尾よく与三郎をおびき出せば、お茶の水まで廻る隙がないとは言えず、——平次はこの微妙な時間を利用して、平常から睨み合いの与三郎をおびき出すのはむずかしいと見ておりますが、無理に辻褄を合せれば、ずいぶんこの假定は成り立たないこともなかったのです。

お此殺しの方は時間も証拠も充分で、事情は金次郎を不利にするばかり、文七は念のためにお糸も調べて見ましたが、これは泣くばかりで一向埒があきません。

「血の着いた金次郎の袴を風呂場へ持ち込んだのはどういうわけだ。真っ直ぐにいわないと、気の毒だがお前にも縄を打たなきゃならない」

こう脅かされると——

「汚れものの始末をしてやるのは、いつものことですから、——暗い中でさらって来た袴に血が着いていたか何うかわかりません」

と言うのです。

「洗濯物を風呂場へ持込むのに、戸に棧さんをおろすのはどういうわけだ。宜い加減なことをいうと承知しないよ」

「誰かに追っかけられて怖こわかったんです」

こういってお糸の聰明な美しい眼が、文七に訴うったえるのでした。

お糸の態度は明かに金次郎を庇かばっているに違いありませんが、
こう巧たくみにいいのがれると、まさか若い娘を縛り上げるわけには行きません。

文七の確信はますます加わるばかり、この上は金次郎に石を抱かせてもと意気込むのを、

「まア、待ってくれ、俺はどうも下手人げしゅにんが他にあるような気がしてならないんだ。与三郎とお此を殺したのは同じ人間だとすると、与三郎をおびき出したのは、どうも金次郎らしくない。それに金次郎はあの血の着いた衾あわせを、お此が殺された日は着ていなかったというし、自分の衾にわざわざ血を付けて、血染の玄翁げんのうを縁の下に投り込んで置いたのもおかしい。お糸が金次郎を庇ったのは、金次郎いとしと思う娘心の勘違いじゃないか」

平次はこう一応は止めました。

「俺はやはり金次郎の外に下手人があるわけはないと思うよ。あの衾は押入の中に投り込んであったというから、下手人が外から入って庭先でお此を殺したのなら、わざわざ押入から金次郎の衾を引出して、血なんか着けて置く筈はあるまい——兄哥の前だが、こればかりは俺の手柄にさしてくれ」

元町の文七は頑がんとして聴入れません。

平次は方面を変えて手代の兼松と小僧の常吉に疑いを向けて

見ましたが、これは念入りに調べるまでもなく全く無関係で第一重い玄翁を振り廻して人を二人まで殺せる人間ではなく、他に働きの者の下女のお稲が一人、これも全く、疑いの外に置かるべきです。

五

幾日も幾日も越後屋に詰めて、どんな小さい手掛りでもと捜した平次は、お此このの初七日の済んだ日、とうとう投げる外はないと思ひ定めました。

女主人でお此の母のお浅は、気性者らしく仕事を運んでおりますが、たった一人の娘を失った深刻な悲しみに打ちひしがれて、時々ぼんやり立止って、物を見詰めていたり、人の姿の見えぬ時は一人でさめざめと泣いたりしております。

姪めいのお糸は弱い身体に鞭むちうつように、痛々しい足を引いて、甲斐甲斐しく働きつけ、こればかりは、暗い越後屋の中にも美しさ、明るさと、魅力みりよくとを撒まき散らしております。

「八、あれを見たか」

「へエー？」

平次は庭を片付けている下男寅蔵の姿を、それと物影から指しました。

「あの眼はただ事ことじゃない、——寅蔵の眼はお糸の姿ばかり追っかけているのに気が付かないのかえ、——一国こく者の寅蔵が生命までもと打込んだ眼だ」

「へエー、そんなものですかねエ」

「気の毒だが八、もういちど練馬^{ねりま}へ行ってくれないか」

「練馬へ？」

「嫌か」

「飛んでもない、行きますよ、行つて来ますよ」

「今度は泊るんだ、腰を据^すえて、寅蔵の親仁の話と、村中の噂^{うわさ}を集めてくれ。あの与三郎の殺された晩、——あの晩は良い月だった、寅蔵は確かに練馬の自分の家に寝ていたかどうか——それから、お此^{この}の殺された日、あれはたしか初午^{はつうま}の日だ。田舎の初午は賑やかだから、寅蔵が家にいたか、昼頃から江戸へ出て夜帰ったか、親仁は隠していても、村の人に訊^きいたらわかるだろう」

「へエー」

「宜いか、確^{しか}と頼んだよ」

平次の言葉は嚴重な行届^{ゆきとど}いたものでした。

忠実な助手の八五郎が、その場からすぐ練馬へ飛んで行ったことはいう迄ありません。先の失敗に懲りて、こんどは念には念を入れて調べたものか、八五郎が練馬から帰ったのは、翌る日の夕方、それもすっかり暗くなってからでした。

「親分、まさに一言もない、親分の見通しに間違いはねえ」

「何うした、八」

「寅蔵という奴は恐ろしい食わせ者ですよ。与三郎の殺された晩は、そつと家を拔出して曉^{あけがた}方帰っているし、お此の殺された日は、昼頃から人目に隠れて、田圃^{たんぼ}伝いに江戸の方へ行つたと村の者がいつてましたよ。親仁の寅右衛門を責^せめると外聞が悪いから倅^{せがれ}の言う通りに家へ泊ったことにしてあるが、あの晩は大方板橋の妓^{おんな}のところへでも遊びに行ったんだらう。堅^{かた}いようでも寅蔵も三十

という男盛りだから——というんで」

「矢張りそうだ」

「寅藏ならあの玄翁げんのうも振り廻せるし、お此このが隣で油を売って、暗くなつてから帰つて来ることも知っている。——踏ふみ込んで挙げましょうか」

「フーム、だが、あの裕は？ 金次郎の裕に血を着けて、押入に投り込むのは少し念入り過ぎるな」

平次はフト迷いましたが、それでも八五郎の勢きおい立つのに誘さそわれて、金沢町の越後屋に乗込みました。

が、その時ちょうど、越後屋は煮えくり返るような騒ぎの真っ最中です。

「大変ッ、親分。寅藏が」

蒼あおくなつて迎えた兼松に案内されて行くと、納屋の後ろの下男郎屋で、寅藏は遺書いしょまで残して死んでいるのでした。

平次はたった一と眼で、それは石見銀山鼠捕いわみぎんざんりか何んか、猛毒もうどくを飲んで死んだとわかりましたが、死骸の側にはその猛毒を入れたと思われる椀も茶碗も、紙っ切一つなく、半枚ずつの半紙を真ん中で継ついで一枚にひろげたのに、手習草紙てならいぞうしのような大きい仮名文字で、

おれはげ

しゅじんだ

と書いてあるではありませんか。

「変な書置だね『俺が下手人だ』と書くならわかつて居るが、かの代りにはも変だし、下手人の人に濁りを打ってしゅじんと書いたのはどういうわけだ」

八五郎は斯んな事を言っております。

「これは寅蔵の書いたものに間違いあるまいな」

大きな下手な字を指して平次は誰にともなく訊きました。

「店中でそんな下手つ糞な字を書く者はありやしません。寅蔵はこの間から、無筆じゃ幅がきかないからって、一生懸命手習をしていましたよ」

後ろから斯う言うのは小僧の常吉でした。

「手習の師匠は誰だ」

と平次。

と間髪を容れずに、

「お糸さんさ、あの人は寅蔵がひいきだし、筆跡も良いから」

そう言われてハッと後ろを振り向いた平次の眼は、多勢の人間の後ろから、凝つと此方を見詰めている、美しいが鋭い二つの眸と、刃金と刃金のように切結んだのです。

平次の胸には映し絵のように、鮮明な下手人の姿が浮びました。ハッと驚いて逃げる相手の眸、

「御用ッ」

平次は一足飛びに、その相手を押えました、それは跛者で病身で——この上もなく美しいお糸の脅え切った姿ではありませんか。

×

×

「驚いたね親分、どうしてあの跛者の娘のお糸が悪者とわかったんで？」

お糸を送ってホッとすると相変らず八五郎は、平次に絵解をせがみました。

「俺も始めは解らなかったが、三人殺しの発頭人はあの痛々しい

娘のお糸さ」

「へエー」

「尤も与三郎とお此を玄翁で殺したのは寅藏だが、そうするよう
に仕向けたのはお糸だ。詳しく言うと、お糸は恐ろしく智恵のま
わる女で、お此と金次郎を亡きものにするために、まず一国者で
考えの足りない寅藏を迷わせた。寅藏はお糸に操られて、思う存
分に動いたのだろう——最初のとき寅藏は、練馬から飛んで来て、
予てお糸の拵えて置いたお此の偽手紙で与三郎をおびき出し、お
茶の水で殺してその晩のうちに練馬へ帰り、その次には矢張り練
馬からやって来て、越後屋の庭で待ち伏せしてお此を殺し、お糸
は内で細工をしてその疑いを金次郎に向け、金次郎を御処刑にす
るつもりだったのさ。お此だけを殺すと、お糸にも疑いが向けら
れるが、与三郎とお此を殺すのは、金次郎の外にはないと——誰
でも思うだろう」

「何んだってそんな事をしたのでしよう」

「最初はお此が妬ましかつたんだろう、ところが、金次郎という
男は正直者で堅造でお糸には眼もくれなかった、そこでお糸は欲
に転んだ。——あの二人が死ぬと、越後屋の跡取りは黙っていて
もお糸に廻つて来る」

「なるほどね」

それはあの弱々しい美しいお糸が考えそうもない悪魔的な企
てですが、平次の推理には素より一点の疑いを挽きようもありま
せん。

「お糸が変に金次郎を庇い立てしながら、洗えば洗う隙のある袷
を血の着いたまま風呂場に置いて、わざとお前に見せたのも可怪

しいし、疑えば、お前が物蔭で様子を見ていることを知って、あんな芝居をやったかも知れないじゃないか。それに、金次郎の袷に血をつけて押入に投り込んだのだって、寅蔵ではちよつとできないからお糸の細工と見るのが順当だ」

「その寅蔵は毒を呑んだじゃありませんか」

「あれもお糸の細工さ、——お糸はあの前の日、俺とお前の話を盗み聴きしたんだろう。寅蔵が練馬を拔出したとわかると、いずれ寅蔵を縛ってどんな調べをされるかもわからず、寅蔵がべラベラしゃべってしまえば、寅蔵をだまし込んで二人まで殺させた自分の首に縄がかかると見て、予て用意した石見銀山の鼠捕りを鰻頭まんじゅうか何んかに入れ、親切めかしく寅蔵にやり、寅蔵がそれを食って死んだのを見届けてから、いろいろの始末をして遺書いしよまで拵こさえたのさ」

「へエー、落付いたものですね」

「寅蔵の死んだのが自害じがいなら、側に毒を入れた椀なり紙なりある筈だ。それに、遺書が半枚の半紙を真ん中で継ついで『おれはげしゅじんだ』と読ませたろう。あれは寅蔵に手習を教える時『おれはげなんのとらぞうおいとはしゅじんだ』と言ったような文句をふざけながら習ならわせ、その二枚を半分ずつ継ついで『おれはげしゅじんだ』と読ませたのだろう。俺はあの遺書いしよを見た時、こいつは寅蔵に手習を教えた奴の仕業だと気が付いたよ」

「なるほどね」

「恐ろしい女だ、うつかりすると俺まで騙だまされるところよ。あんまり細工が過ぎて、反かえって尻尾を出したが——」

こう説明されると何も彼も明らかにあります。

あの淋しく弱々しい女がこれだけの凶悪な事を企たくらんだと思うと、何んとなく薄寒くなるような心持ですが、それを見破とっさつて咄嗟にお糸を押えた平次の明智は物の見事です。

「なあ――る」

もう一度そういつて、ガラッ八はこの世にも優れた親分を見上げました。

その後お糸は牢死ろうしし、金次郎は越後屋の跡を立てたと聴きましたが、お糸の痛々しい悩ましさ、いいようもない魅力が、長く八五郎の記憶にこびり付いておりました。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

本作品の初出は底本では「昭和十九年書下し」となっています。

挿絵―萩 柚月

初出―不詳

底本―「錢形平次捕物全集」第八巻 河出書房 昭和三十一年八月十五日初版

編集・発行 錢形倶楽部